

1 開 会
事務局進行

2 市長あいさつ

3 教育長あいさつ

4 議 事

（1）教育諸課題解決に向けた取組について

・不登校問題

事務局説明

（委員） 現状は、人的な面や施設面は充実してきているが、課題が多様化しており、それぞれに合った対応ができない。個々に寄り添った対応ができる専門的な部分の充実が大事だと話している。学校教育審議会に諮問し、検討してもらっているので、答申を待ちたい。

（市長） これまでは、学校に戻すということが大原則だったが、その考え方は変わった。今後は、デジタル技術をうまく活用しながら、どんな学びができるか考えなければならぬ。

（教育長） 学校に戻る過程としてポットラックがあり、生活を立て直して、心を落ち着けて学校につなげていく。教室に入れなかったら別室登校等で、徐々に学校に慣れて、クラスに入っていくことを見るのが教員の願いである。

ただ、個々の状況も違うし、その原因も異なるので、一人ひとりにどう寄り添っていくかしっかりと考えていかなければならない。

ポットラックについては、昼夜逆転する子がいるので、最初は午後から来られるようにし、それから学校に戻ろうと思っている児童・生徒にとっては、学習の機会も提供する。ポットラックに来られない場合は、タブレット端末を使い、いろんな学習方法がとれるような環境を整えていかなければいけない。

タブレット端末については、全校、全ての児童・生徒がしっかりと使っている。

（委員） 個々によって違いがあると思う。そういうことに対応できる専門機関があれば、すごくいいのではないか。個々の教師の判断では、なかなか手に負えないところもある。

（市長） 少し集団的な教育ができる子もいるだろうし、個の学びが必要な場面もあるだろうし、在宅で学びを進めたいという子たちもいるだろうし、全くほかのシチュエーションを望む子たちもいるだろうけど、今はほぼ学校が一元的にやっているが、そこではなかなかということですね。

（委員） もう少し具体的に取り組めるような機関、あるいは専門家がおられたらいいと思

う。

(委員) 今、京田辺市では小・中学校の不登校に対する連携をしているし、別室登校、放課後登校、ポットラックというさまざまな環境が整備されているが、そうになると多種多様な対応が必要になるという面で、先生の働き方について難しいところがある。

その子だけにというわけにもいかないし、経験を積まれている先生も少なくなっているのので、専門的な人や機関、施設があれば、もっと全体的に横のつながりも持ちながら、子どもたちを支援していくことができるのではないかな。

(市長) 先生の年齢層の偏在は、結構あるのですか。

(教育長) あります。

(委員) 団塊の世代で、急に学校ができて多かったが、その時代の先生が退職されて、代わりに20代、30代の先生が大量に採用という形になっている。

(市長) 教育技術とか、先生の指導力であったりとか、ちょっと薄れたりする傾向はあるのですか。

(教育長) ここ数年、かなり多くの先生が定年を迎えられ、中堅より若い層が結構厚い。対策として、デジタル技術を活用したノウハウの蓄積とか、先輩教員から学ぶ機会を各学校で積極的に設けている。デジタル技術については、若い教員にベテラン教員が学ぶというところもあるし、逆にベテラン教員からは授業の進め方とか、児童・生徒への寄り添い方といったノウハウについて、中堅、若い先生に引き継いでおり、いい意味での交流ができています。

(市長) 学校に子どもを通わせている保護者の立場から言うと、先生がチームになっていたかかないといけないと思っており、先生が個々に児童・生徒と向き合うだけではなく、困難事案が発生したときに、学校としてどう関わるかというチームプレーをやっていかななくてはならないと思うが、中堅、ベテラン層が非常に薄くなっていて、対応が難しかったりすることがあるのか。

(教育長) 教員数は、学校規模によって決まるので、教員が少ない学校もある。こうした学校では、意見をまとめるのは早いかもしれないが、できないところも出てきているのは確かである。

もう一つは、管理職の年齢がここ数年でかなり下がる。学校の中心としてリーダーシップを取る方の年齢がぐっと下がっているのので、今のうちから意識を持って教員の育成をしていかなければならない。

(市長) この辺は、府教委の枠組みの話ですか。市教委としてもやろうと思ったらできるのですか。

(教育長) 両方です。教頭あるいは次期管理職、教務主任あたりを集めて研修会等も実施しているので、府教育委員会、市教育委員会、校長会がしっかり連携しながら育成していくという感じです。

(委員) 不登校が最も課題だと思う。学校の中で、アットホームで包み込まれるような環境をつくっていくということは大事で、十分していると思うし、ポットラックな

どの少し学校から離れたところでも、いろんな受入れをしっかりとやっていると思う。

京田辺市に限らず、できにくいところはアウトリーチで、家庭に出向くというような部分がつくられていない。

中学校の不登校の生徒が、中学3年になったらどっちかという学校から福祉のほうに変わる。個々の程度差はあるが、家では勉強どころではなく、もっと学び直しとか育ち直しからというような子どももたくさんおり、それが年齢だけ上がっていくというのもあって、学校で包み込むような部分と、学校に行きにくかったらポットラックとか、いろんな施設、場を持つことと、もう一つは家庭にどういうふうにアプローチしていくかというような部分も考えてみたらと思う。学校の先生が生徒指導で学校が終わったら家庭へ行っていたが、今は、働き方改革などでできにくいので、そういう機能を充実していくような形である。

新指導要領になり学ぶことはたくさんあるので、そういう課題もあると思う。

(市長) アウトリーチは、これまで個々の先生が、自らのポテンシャルで行っていたところがあるが、どう体制整備するかというようなことは、生徒それぞれの状況を見定めて、先生に帰結するのではないというのは押さえなければいけないかもしれない。

支援するということを学校の外からもしていかないといけないと感じる。あと、家庭訪問もそうだが、不登校の問題を抱えた保護者へのフォローとか、例えば勉強会であるとか、そういった形が必要なのかなと感じる。

今後、学校教育審議会で具体的な答申が出てくると思うし、それを踏まえて、教育委員会と市長部局とがどんな役割分担ができて、どうできるかというのはしっかり考えさせていただけたらと思うし、家庭での教育力もそうだが、その前にある家庭での保育力も困難を抱えてきているというのも全部つながっていくと思っているので、意思疎通をしながらうまくさせていただけたらと思う。

・学校間の児童生徒数の偏在解消

事務局説明

(市長) 成人式の前日のリハーサルで、成人のつどい実行委員で培良中出身の新成人の子たちが、自分の母校、培良中について、あまりにも生徒数が少なくて、やりたいクラブができなかったりとか、いろんなことを心配している。卒業して、4、5年たつような子たちが、心配している切実な声を聞くと、スピード感を持ってやらなければならない課題ではないかと改めて認識した。

その子たちに言ったのは、培良中学校区では、今後、大規模な住宅開発もなく、爆発的にふえることはない。私が考えることは二つで、一つは校区変更、もう一つは、特色化をつけて市内全域から行けるようにする。

田辺中も大住中の子も来ており、大住中の子らは校区変更だと言われても遠い話だと思っている。一方、田辺中の子らは、校区変更と言われたら敏感に反応す

る。培良中の子らは、相当長い年月をかけて今の校区が形成されてきたから、ぱっと校区変更って難しくないですかって、彼らから言うわけです。それなら、もう少し特色をつけてもらって、選んでもらえるような学校にしてほしいみたいな率直な意見を言ってくれたのです。

こういう意見は大事だと思っていて、来年度、審議会に諮られることになりましたが、スピード感を持ってしなければならない対応で、ぜひとも議論を進めていただけたらありがたいと思う。

(委員) 私も教育委員として、培良中学校に行く機会がある中で、学校自体が大きいのに生徒がものすごく少ないと感じる。あれだけ広いグラウンドがあるのに野球部がないとか、規模が小さいがために子どもたちができないということがあるというのは、保護者から見てもつらいなと思う。

校区変更といっても、子どもたちが言っていたみたいに限りがあるような気もするので、行きたいなと思う学校にして欲しいというのが、保護者としては、正直なところです。

(委員) この議論は、前から教育委員の中でもあった。

確かに大住地域はある程度、安定している。中学校で偏在を解消するには、距離的な条件とかいろんな条件があるが、田辺中校区と培良中校区については、いろんな工夫の中で包み込める部分と、やはり考えなければならないとことがあると思う。培良中は少ないという話があったが、逆に田辺中学や三山木小学校は、飽和状態です。少ないのは、きめ細かくできていい面もあるが、多いというのは、今後も10年スパンで見えていくと解消されなく、プレハブとか、いろんなことの中で考えていくような状態が続くということについて、解消を考えていかなければいけない。

このときになったらピークが来るから下がるという話が繰り返されていると思う。例えば田辺中学であれば、7年間工事していた。やっと全部プレハブも解体して、更地になったらまたプレハブができて、また今後もしていかないといけないというような現状になっている。データでは三山木小学校が1,800までいくという話ですから、それがみんな田辺中学にやってくるとなると、なかなかその数を培良へ持っていくということでも解決しない。今後を含めた中でバランスのいい拠点はどう構えていくかということと同時に、その拠点だけでは解決できないので、いろんな特色ある学校づくりを進めて、今している府の施策のような部分も持ちながら、やっていくということも大事になってくる。

(市長) 急がなければならない。財政も預かっている私の立場からすると、また造るのかと。少ない方の話だけではなく、多い方の話もしていただかなければいけないと思う。

この前、東京に要望活動で行ったが、実は小学校、中学校がプレハブ校舎ですと言ったら、今どきプレハブですかと言われる。新たに学校を造るのは現実的ではないし、5年、10年かかるので、今いる子供たちの学びを止めないために、

どう充実した学びができるかということについては、スピード感を持ってやらなければならない課題だと思っている。

(委員) 4、5年ぐらいのスパンの、それでも長いぐらいの時間の中で何か変えていかないといけないというのは結構難しいと思う。校区を変更するということは、ある意味機械的にできるかも知れないが、なかなか難しいし、いろんな条件もある。

結構デジタル教育がタブレットを含めて進んでいて、草内小と田辺東小に培良中を入れた義務教育学校的な特色ある学びができるというアピールをしていく、いわゆる特認校扱いみたいな感じですが、そういうふうにしていくと希望者もふえるかなと思うが、どれだけのニーズがあるかというのも調査しないといけないし、分からない部分も多いと思う。急がないといけない難しい問題です。

(委員) 私は、個々の地域、枠組みがすごく根付いていると感じた。そのところどころの土地での伝統や文化がずっと続いていて、そこに小学校や中学校がある。ほかの市町では大胆に校区再編されているところもたくさんあるが、実際にそれが京田辺市でできるのかと考えると、本当に難しいのではないかとと思っている。数合わせをして平均的なものにするというのも一つだが、歴史、伝統を守る上でも、それを残しながら偏在を解消するためには、その学校に行きたいと思うような特色と行ける選択肢をつくるということも解決の一つと思っている。

(市長) 私も全国の首長と話をするが、相当苦勞されている。例えば、タワーマンションが来た時点でどうしていますかと聞いたら、計画が出た段階で、ここのマンションの住人は隣に小学校があるけどこっちの小学校に行ってくれということにするとか、ある意味、短期的な、緊急避難的な対応をしているところもあるようだ。私としては、個々の学校の持っている風土を大切にしながらやっていかなければならないと思っている。

(教育長) 学校というのは、適正規模というのがやはりあると思う。大規模校であるとなかなか目が行き届かないということが生じるし、少ないところは、活気がないという部分も出てくる。

今、大規模校で問題になっているのが、プレハブを三山木小学校とか田辺中学校は建設しなければならないというところである。小規模校については、部活動が成立しないということが出てきているし、各学校が適正規模になるのは難しい。

三山木小学校でいうと、平成23年で359人、5年後の平成28年は680人、令和3年度、今年度は1,016人、5年後の令和8年度は1,191人、ここがピークです。これについては、令和6年度がピークで、今のプレハブでいけるはずではなかったのかということでお叱りを受けている。これは同志社山手地域の入居がずれてしまって、入居がずれたら全体のピークは後ろへずれるのではなく、入居の最初のほうが遅れても、途中で加速するから、どんどん重なっていく。

単純な解決法からいろいろ考えなければならない方法まで言うと、四つぐらいがある。一つは校区変更。これは地域性とか、学校の伝統もあるので、結構難し

い部分がある。それから統廃合。これはその学校に愛着を感じている方にとってはけしからんことというふうに思われる。それから新設。これは財政的に、ピーク後の減少が見える中で至難の業。

答えではないが、例えば普賢寺小学校は、小規模特認校だが、市内全域から児童が通っていて、地域の方がものすごく協力していただいているので、コミュニティスクールとしてしっかりと地域に根差した教育がなされている。そういったことも一つの方法だと思っている。今後、学校教育審議会に諮問する中で、いろんな意見をいただけると思うので、短期的と中長期的をしっかりと分けながら、でも着実に進めていかなければならないことだというふうに思っている。

(市長) 本当に悩ましいのです。まさか新成人からそんな声を聞くとは思わなかった。今の子らも絶対いろんなことを思っているはずで、ぜひ早めにやりたいので、よろしくお願いします。

(2) 意見交換

(市長) スポーツでは、ハンドボールが全国的にも名がとおっているので、しっかり取り組んでいきたい。

歴史、伝統、文化では、古墳が出て、いろんな意見をいただいたが、市として保存の方向で取り組みを進める。前方後円墳なので400年代前半だということである。大和朝廷になる前の奈良の影響範囲の一番北限がここだったのではないかと、そういう歴史ロマンを含めて、今に至るまで脈々と続いた町だということが次の子どもたちにしっかりと結びついていけば、より愛着を持ってもらえる教育につながればと思っている。

(教育長) 子どもの頃、自分の住んでいる町の歴史に触れたということがすごく頭に残っていて、自分の住んでいるところに誇りを持った。未来を見て進むのは大事だが、過去をしっかりと理解した上で前に進むのが正しい姿である。

天理山古墳についても、何年か先に整備されるとしたら、市民全体の憩いの場になると思うが、それに小・中学生、幼稚園児と一緒に学んだり、くつろいだりしてほしいというのが私の思いです。

(市長) 最近の考古学ですごいのが、保存状態がいいので中身は掘らずに測量して、20年刻みぐらいでいつできたか分かる。先になると思うが、うまく学校教育とつながればいいなと思っている。

(委員) 天神山遺跡は1世紀の弥生時代の遺跡で、その頃は、まだ枚方のほうまで海があり、木津川が大動脈で、その流れを監視するための集落の遺跡で、2,000年以上前から人が住んでいたと思う。

こういう歴史、文化を知るということはすごく大事なことだと思う。

(市長) 大学1、2年生はサークル活動や地域と関わる活動が皆無で、3、4年生はそれを経験しているが、次に伝える場を知らないので、地域とどう関わるかとか、子どもたちとどんな活動をするかとか教わらないまま、1、2年生は3、4年生

になり、今後10年ぐらいは大学と地域や行政との連携が非常に細る可能性があるという心配をしている。

もう一つは、地域の活動の中核的な存在であった60代70代の方が活動を縮小されているので、相当地域力も落ちている。ここ2年で相当細ったので、いろんな地域力の在り方という取り組みを進めたいが、回復させるのに5年は最低かかるだろうと思うので、いろんな知恵を借りながら、地域力を高めていくことを進めていきたいと思っている。人と人とのつながりを大事にした運営をしていきたい。

良い、悪いは別にして、相当この2年で行政依存が進んだと思っている。これは、いざというときに、相当ダメージを受ける。震災が起こったときに、行政が全て多分対応しきれない。学校教育も一緒に、学校の教育に対しての信頼を生徒たちと高めていくということは、まずは学校の中での取り組みはもちろんだが、地域との関わりをうまく学校教育の中で巻き込んでいければと思ったりする。

地域との関わりの活動も大分細っている。人とのつながりということで、私たちもいろんな取り組みを進めていこうとしているが、そこに学校教育も関わっていただいて、地域と学校ももう一遍つながり、そのつながりを太くしていく取り組みをやっていたらと思っている。

もう一つは、せっかく今、タブレットを使った教育を進めていただいているので、例えば長期休暇時とかにうまく活用してもらって、今までプリントの宿題をもらっていただけであったのを、先生とつながれる取り組みがあったら、逆に保護者からもつながっているみたいなことになればいいと思っている。デジタルの進展は変わらないので、学校がうまく使っていただけたらありがたいと思う。持ち帰りがいいのかどうか分からないが、ぜひいろいろとお力をいただけたらと思っている。

(委員) 確かに地域の中の学校を見ても、学校と地域の人たちのつながりというのが大事で、今までそういう営みがずっとあったが、今、コロナ禍という現状がある。また、65歳以上の人材が減ってきて、今まで登校指導とか学校のいろんな活動で頻繁に頑張っていた部分が大変難しくなっていくので、地域との連携も含めて、アフターコロナの中で考えていかなければならない。

大学生や文化の継承のこととかで、地域の中で触れ合ったり人と関わったりする力が回復するための経験をつけていくのに、アフターコロナの中で、すごく時間と機会を要するような形になっている。何か手だてを考えていかなければならないと思っているが、なかなか考えられない。

(市長) 2年間ほぼPTA活動なく、引継ぎができていない。学校側に対してお願いしたいのは、恐れることなく会議を開いてほしいと思う。保護者が不安に思ってもらえるような場面でも、学校はきちんと説明し、PTAに限りませんが、オンラインでも会議はできる。その会議さえ細ってしまうと、今、本部役員でさえ細っているのに、PTAの地域役員やクラス役員なんてもっと細るということになるので、

学校側のほうから積極的なアプローチを是非してほしいと思っている。

そのことが、もう1回保護者とのつながり、地域とのつながり、いろんなものを学校側がつなぎ留める関係性を構築していくきっかけにしてほしいと思っている。地域に子どもたちの顔が見えないということは、逆に学校のいろんな活動にとってデメリットになるということを、学校側も気づいてほしいと思っていて、ぜひそこは何とかお願いしたい。

(委員) GIGAスクール構想のタブレットを活用されているということで、資料があるということです。

(教育総務室担当課長) タブレット端末の活用状況について、資料の動画を用意しておりますので、上映させていただきます。

(動画上映)

(市長) 3中学校と9小学校で、それぞれしていることは変わってくると思うが、横展開を是非やってほしいと思う。

(教育長) 培良中学校は、他校に比べて半歩リードくらいです。

(委員) 私たちもちょうど1年前、初めてタブレットが中学校に入った頃に培良中学校の授業での活用を見て、これからどういう展開が行われるかというのを楽しみにしていたのですけれども、ほかの小・中学校でも、積極的に授業で使われていますし、培良中学校も半歩リードされていますけれども、ほかの小・中学校にも横つながりでさまざまな研修が行われ、情報とかを共有していただいていると思うので、どんどん発展していっていると思う。

今、子どもたちも大分使えるようになって、先生も大分慣れてきたと思うのですが、タブレットを使いながら、京田辺市がどうやって学力を向上させていくかというのに対しても、すごく今後の発展に興味があるので、そういうところをきょう議論できたらいいかなと思う。まず情報を扱うということで、情報の見分けとか判別というものに対して、しっかりと学校側で教育をもうちょっとしっかりとやってほしい。情報に踊らされないような子どもたちに育ってほしいということがまず一つ。次に情報を積み上げていくということについて、どこで子どもたちがつまづいていたり、どこが得意であったりというような、子どもたちの学びがどういうふうに進化していったかを、長期間使って見える化することで、子どもたちの難しいところとかよいところを見るのに利用することができたらいいと思うのが2点目です。

(市長) つまづきはどこがきっかけなのが見える化されるのは、相当、先生にとってプラスではないかと思う。今までだったら学力テストで、どこで間違えたかという最後の結果しか分からないけれども、もし授業中にこの問題を解いてみようとしたときに、この生徒はここでつまづいたということを見える化することによって、弱点をどう補っていけるか、先生がより適切に指導ができることになればいいと思っている。もう一つが、さらに進んで、つまづきを放ったらかしにされていて、学年が上がっていくごとにそのつまづきを克服できずに中学校や高校に行くと

きに、非常に大きなつまずきになる可能性があるので、未然に防ぐという意味で見える化して、つまずきのきっかけをどう潰してもらえるかということをやってもらえたらありがたいと思っている。

タブレットを導入するのは、あくまでも手段であって、目的としては学びを深めて、よりよい教育をこの京田辺でやりたいという思いがあったので、先生がどんな気づきがあったのか聞きたいと思う。

(教育長) 結果がすぐに出ない部分もあるので、きちっと調査等して把握していかなければならないと思っている。

私は、以前にＩＣＴを駆使することをコンセプトとした新設高校で仕事をしていましたので、その経験から考えるとタブレット端末は無限大なのです。それはものすごくいいのですが、反面、これになじめない子も少ないですけどいます。そこを見逃してしまわないかという危機感というか、危惧しているところはある。

それと、タブレット端末を導入することによって、自分が声に出して言いにくいことでも、自分の意見を発信できるところもある。それはプラスの面ですけども、それを使って誹謗中傷することがあり得ますから、どういうふうに未然防止するか、あるいはあった場合にどう適切に対応していくかということもあるので、これが導入されて学びが広がったとかだけで安心していただけないと、教育委員会としては危機感として持っている。

(市長) テクノロジーがどこまで行くのだと最近思っていて、ＶＲのヘッドセットをつけてメタバースのような仮想空間でも教育活動ができるのではないかな。自分のアバターを使って発表することができるとなると、もしかすると、今までなかなか言えなかった子たちがより意見を言いやすくなったりするのではないかな。また、なじめない子たちに対するケアをきちんとやっていただきつつ、うまく学びにつながるような活用を十分にいただけたらありがたいと思う。あとは長期休暇のときにどうするかをお願いします。

(委員) かつては学校というのは、先生が黒板に書いて子どもがノートを取ったり、それを覚えて試験をするというようなクラシックな授業パターンがあるが、少なくともそういう授業の形からは、このタブレットが入ることによってかなり変わっていくのではないかなと思う。ロイロノートでは、思考ツールでいろんな考えをまとめる図式があり、そういうのをしっかりやっていると、子どもたちが自分で考えを整理して述べていくという、そういうツールが活用次第ではすごくいいのかなと思う。

それと、教室にＷｉ－Ｆｉができていますので、学校以外のところともつながる。たまたま私は連携で松井ヶ丘小学校を持っており、昨日、感染者が出たので行けなかったが、先生と急遽リモートで学生を含めて協議をすることができた。ほかの学校の生徒や海外の日本人学校の生徒とのつながりとか、割と既にやっておられる先生も、京田辺市ではないがおられる。ですから、学校外の方とのつながりというのも割とできる可能性はあるのではないかなと思っている。

- (市長) リアルに会えたらなお良いのですが、去年に田辺東小学校で同志社女子大学生1年生が、地域の方たちも来ていただいてやっていたというのもあったので、うまく活用してもらったらありがたい。学校教育はもう少し幅も広がってくるかなと思う。
- (委員) 生涯教育に関して、この4月から成人が18歳法律が施行されるが、式典として成人式を行政としてどうするのかというようなことが、法律上の遵守の問題で出てくるような気がする。
- それと、式典と成人になるための地域の課題というのは別々に考えていって、最終目的は地域の中で成人になっていくにあたり、地域のことを考えていくというような取り組みもあっていいのではないかなと思う。18歳になったときに、あなたはもう大人になったから地域のことをどう考えるのですかというような提案を考えてもらうことがあってもいいかなと思う。
- (市長) 今は成人の前に投票権が発生している。18歳になって、親からうるさく言われて投票に行った子たちは、19とか20歳になっても2回目の投票に行き、1回目の投票を行かなかつたら、2回目も3回目も行かないという傾向が強いと聞いているので、ポイントはまず18歳だと思う。それは、選挙だけではなく、18歳投票権が始まったと同時に、今回、成人になることによって責任の範疇が広がってくる、それによってもう1回自分たちが成人という範疇でこの町をどう考えるかということのきっかけづくりをどうするかですね。
- (委員) 生涯教育、生涯学習の課題ですね。
- (市長) 今は取りあえず20歳の成人式を20歳のつどいでそのまま残していくことになると思う。18歳は一番アプローチしにくい年代なのですが、積極的にこちら側からプッシュ式のアプリでつながっているというメッセージを発し続けることが大事なのではないかと聞かせてもらって、悩みや困難事案があったときに、こんな教室があるよとか、こんな相談受け付けていますよという取り組みができればと思っている。本市は大学生も多いので、特に18歳、19歳ぐらいで地方から来て住んでいる子たちも大事な市民なので、その子たちもせつかくきっかけがあってここに住んでくれたのだから、何とかつながりを持ちたいと思っているので、何かテクノロジーを考えたいと思っている。
- (教育長) 高校生はこのとき大学受験で、そちらのほうに頭が偏ってしまっているもので、今まで20歳でやっていた成人式の名称を変更して、今と同じ20歳のときにやるのが適切かなとずっと思っていた。周りの市町も同じような考えなのですが、18歳で成人になったという自覚、そこから責任も生じるが、それから社会人としてスタートだということをしっかりと示す、理解させることは大事だなと思う。
- (市長) 何をするかが難しいですね。
- (教育長) さっき市長が言われたように、LINEなどのアプリを駆使することになると思う。
- (市長) 成人のつどいというわけにもいかないし、少し難しいです。いろんな責任の範疇

が発生します。

(委員) 結構大きいです。契約のことも含めて。

(教育長) ただ、成人式を18歳でしますというのは社会でも受け入れにくいのかなと思いつつながら、でもそういう大切なときですから、しっかり考えていかないといけない。

(委員) 18歳の成人がこの4月からというのを市民がどれぐらい理解しているのか。具体的にどういう権利や義務がどう変わるのかということ、一般の方も十分理解されてないですし、当の18歳の方々もそこまでいってないのではないかな。晴れ着を着て成人式だということで、内容は市長の挨拶や委員が決めた催しなどがあるが、やはり成人式の意義を踏まえた内容も入れていかな駄目ではないかな。良い機会なので、内容も含めて18歳か二十歳か、節目の年としてするのであれば、その辺りの位置づけとかを、当事者もそうですけど、周辺の市民の皆さんにも理解いただけるような主体的な訴えかけも必要じゃないかなと思う。

(委員) 私の18歳に近い子どもも、18歳で成人の実感は湧かないと言います。高校の先生でも、高校3年生で18歳の子と18歳じゃない子がいるという面で、責任の面でも違うということで、そういう混在があるというので悩まれている先生もいらっしゃると思いますが、ほとんどの先生方、一般市民の方は、18歳の成人で何が変わるのだということにぴんとこられてないと思いますし、保護者の私自身でさえ、そのことに対してどういうふうに教育をしていいのかな、家庭で助言をすればいいのかなというのが、契約や選挙権のことなど初めて聞かされて気づくという面もあったので、保護者の啓発という意味でも、何か発信をしていくような方法が必要だとすごく思っている。

(市長) 市の広報で、18歳集めて座談会してもらいましょうか。

(委員) 学生がたくさんいるので、18歳としての自分の発信の仕方なんかもあっていいかなというふうに思う。

実は、今回の新しい学習指導要領では、小学生6年生で今まで歴史を最初に学ぶのですが、今度は憲法から学ぶようになってるし、高校では現代社会がなくなって公共という科目に変わっている。全部18歳成人をにらんだ指導要領の改訂です。だから、本当は先生方もそういう意味では心構えを変えていただかないといけない。小学生も12歳ですから、6年後に成人になるわけです。中学やったら3年後に成人ですから、そういう意味での教育というのが大事かなと思う。

(市長) 18歳のどこまでご存じかというのもありますので、どんなことができるか、十分考えていきたいというふうに思いますし、そのときにお知恵をいただけたらと思っている。

(委員) 男女参画とかジェンダーとかを考えるような新聞記事が連載で載っていたのですが、その中で学校現場の管理職が少ないというような記事を目にしたことがありました。行政の教育委員会事務局の女性の登用が少ないということもあり、全国で女性の割合が15%余りで、京都府はもっと低いみたいになっていました。この間、教育委員会事務局ではゼロだなと話をしましたが、これは職員の構成とかい

ろいろあつての結果と思う。ただ、小学校、中学校の現場では女性の職員、教員の割合は非常に多くて、教育委員会でも割にいると思うが、男女参画で考えたときに育成も考えていかなければならないと思う。

京田辺市の男女共同参画計画事業案の昨年度のまとめでは、職員のことの言及はなかったように思う。両性の目で見えていくという意味でいくと、今後、特に大事になってくる。例えば京都市とか大きな市では、教育行政職員の育成というのをプログラム化されて、ある程度将来を担っていただくような方を計画的に育成されているプログラムがあるところもあるが、京田辺市では教育行政という専門の職員の育成とか、だんだんニーズが多くなっていると思うので、そういうことも考えることも大事なかなと思う。

(市長) 教育委員会に限らず、女性の管理職の在り方というよりも人材育成の問題につながっていると思っていて、要は男女問わずに管理職を望まない方もいらっしゃいますし、そうは言いながら、その能力であつたりを見て、ぜひなつてほしいと思う職員がなかなか逡巡する場面があつたりというのも事実です。民間企業だったら、幹部職員育成の部分で別立てでやっていたりするけど、行政としては難しいかもしれないが、今、人材育成方針を定めている最中で、いろんな取り組みが考えられる中で、当然女性比率というのは、十分意識して取り組まないといけないが、管理職はもうという社会の風潮もあるように見受けられるので、そこは人材育成の中でやりたいと思っている。

あと、教育の行政職員の専門職については、本市の職員でも、出世は要らず専門職でいきたいという職員はいるが、そういう職制にはなっていない。

それと、本市では幼保含めて、現業の職員が多い状況で、なかなか事務職でそういう専門職を独自に育成してというわけにかなかったというのがあり、今の事務職員の手薄さにもつながっている。将来的には、その比率をどうするかということとはしっかり考えて、一足飛びに行政職員の育成ということにはつながりにくいと思っているが、まずはライン職、専門職みたいな話で、いろんな働き方の在り方が変わってきているので、それにどう組織として応えられるかということを考えていかなければいけないと、この1、2年間思いを持っていたが、結果として退職した職員がいたりする。それは、今までの既存の働き方の在り方だったら難しいこともあるので、まずは働き方の部分からしっかり考えていきたい。それは、多分全国どこでも課題だと思う。今までは市役所に入ったら勤め上げるという観点を持っていたが、自分の思っている価値観のところに転職するという考えを、市役所に入っている職員はいっぱいいる。そういう自己実現に向かった組織の在り方というのは考えておかないといけないというのは、最近の流れ、実感から思っているので、しっかりと考えていきたい。

5 閉会